

親の気持ち2007

茗溪塾塾長 宇野 雅春

TV画面をよく見ていると、何か普通と違う授業参観風景が映っています。違和感を感じてじっと目を凝らしてみると、授業を受けているのが親達で、参観しているのが子供達です。指名された父親が、自分の息子についての作文を読み上げようとしています。いってみれば子供が「僕のお父さん」という作文を読むようなことです。皆にここにこして和やかな雰囲気です。でも読み始めてすぐ、読んでいるお父さんが詰まってしまう。

「息子の趣味は...」と言いかけて言葉が出ないのです。つまり息子の趣味を知らないということなのです。それまで和やかだった教室の雰囲気が一変します。自分の息子の趣味も知らないのか！という非難めいた雰囲気。そこまで来てやっとそれが、コマーシャルだと分かります。「もっと子供のことを知ろう！」みたいなテロップが流れて 広告機構と提供者の名が続きます。「引きつける」という点ではかなりインパクトのあるコマーシャルだと思いますが、「自分の息子の趣味???'と考えているうちになんか腹立たしい気持ちになってきたのです。

疎遠な家族関係に警鐘を鳴らすと言えば、聞こえはいいですが、逆に自分の息子が父親の趣味を知っているのだろうか？と考えたら、この父親批判のコマーシャルはあまりにも一方的に思えてきたのです。「亭主元気で留守がいい...」という母親と、「金さえ出してくれたら後は黙ってほしい」子供達。そして「子供の趣味も知らないのか！」となじられるのでは、あまりに父親はかわいそうではないかと父親の一人としては思ったのです。

昔のような父権絶対の時代でないとしても、日夜仕事に縛られている父親にあれこれ要求を突きつけるばかりで、良いのだろうか？「父親も人間だ！」と叫びたい...辛いときも、泣きたいときも、仕事なんか辞めてやるなんて思うこともある弱い人間だ！ということにそろそろ気づいてほしい。(ちょっと大げさか?)

話はずいぶんそれでしたが、子供達はあらゆる意味で親というのを誤解しています。受験の時も親は祈るような気持ちで合格発表を待ちますが、それは「親の期待」という側面だけではありません。子供が自分の足できちんと歩いていってほしいという願いからです。「ドラゴン桜」という漫画がありましたが、今最終回に近づいてきていて、こんなシーンがありました。エリート家庭に育ちながら優秀な兄達とは異なり、落ちこぼれだった勇介という主人公が、ついにセンター試験の足きりをクリアして、東大2次を受けることとなります。その前夜、父親が勇介に話しかけます。

父「明日だな。2次試験...」勇介「ん...」父「勇介...別にどっちでもいいぞ」勇介「えっ...」父「受かっても落ちててもどっちでもいい」勇介「なに...それ？」父「だから...どっちでもいいんだよ。合格してもだめでも」勇介「...」父「お前は一年間よく頑張った。それだけで父さんは十分うれしい」勇介「...」父「嘘じゃない...本当だ。心からそう思っている」勇介「あ...そう」父「ああ」

ずっーと口やかましく高飛車だった父親が勇介のがんばりに、心を開いているのです。子供が努力をしている事が親にとっては嬉しいことです。子供の幸福を願うあまり押しつけがましくなったりもしますが、親の子供への気持ちは意外と純粋なものです。親が理解がありすぎて子どもがダメになることもあるし、親がダメでも子どもがしっかりすることもあるはず。子どもにとってどれが良いことなのかはわかりません。豊かな社会で、心がきめ細かさを要求されてきている時代なのでしょうが、お互いの立場や状況を理解するのは誰にとっても難しいことです。「親の気持ち」を表面的なことだけで割り切らないで欲しいと願う今日この頃です。